

大学生の共感性に関する教育介入研究の文献的検討

著者	鈴江 毅
雑誌名	静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会・自然科学 篇
巻	71
ページ	256-263
発行年	2020-12
出版者	静岡大学大学院教育学領域
URL	http://doi.org/10.14945/00027840

大学生の共感性に関する教育介入研究の文献的検討

A Literature Review of Educational Intervention Study on Empathy among University Students

鈴江 毅¹

SUZUE Takeshi

（令和2年11月30日受理）

要旨

【目的】大学生における共感性に関する教育介入研究とその成果を、文献により明らかにすることを目的とした。

【方法】データベースはCiNii (Citation Information by National institute of informatics)を用い、「大学生」「共感性」「教育」を検索キーワードとした。研究目的に則した論文から、教育介入内容、共感性の評価指標、共感性の変化、主な成果を抽出し、それらの内容について検討した。

【結果】検索された69論文のうち6論文を分析対象とした。教育介入研究の内容は、カウンセリング技法教育、患者理解に関する講義、場面想定法を用いた道徳教育、体育実習（柔道やダンス）であった。そのうち4論文では、大学生の共感性を高めるための教育的介入プログラムあるいは体育実習を行い、前後での共感性尺度の上昇を検討していた。すべての研究で共感性の上昇が確認され、有意に上昇した下位項目は「共感意図」、「視点取得」、「他者指向的反応」などであった。しかし「情緒的側面」に関しては変化は認められず、一部の研究では介入後に低下していた。残りの2論文は質的研究であったが、同様に共感性を高めるための教育的介入プログラムを行い、施行後の参加大学生の言説分析から共感性が高まったと判断していた。

【考察】大学生における共感に関する教育介入研究を解析した結果、すべての研究で共感性の上昇が認められ、共感性を高めるプログラムあるいは体育実習の有効性が示唆された。しかし「情緒的側面」に関しては効果的なものではなく、共感性の「情緒的側面」の強化を目標にした教育介入の必要性が考えられた。また特徴的なものとして柔道やダンスの体育実習という身体活動を介した教育介入の有効性が示唆された。今後、大学生に対して、情緒的側面も包含した総合的な共感性強化を目標とし、身体活動を介するなどより工夫された教育介入方法による共感力教育を開発すべきと考えられた。

I はじめに

文部科学省において「教育は人なり」と言われるように、国民が求める学校教育を実現するためには、子どもたちや保護者はもとより、広く社会から尊敬され、信頼される質の高い教師を養成・確保することが不可欠であるとされ、優れた教師の条件として「教職に対する強い情

¹ 保健体育系列

熱」「教育の専門家としての確かな力量」「総合的な人間力」の3つがあげられている。その中でも“人間力”においては、自己と他者との関係が重要視されている。また、現行学習指導要領総則においても、教育に求められているのは“人間力”の育成であり、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する「豊かな心」、すなわち共感力をはぐくむことが目標とされている。

現在わが国の教育現場を教師中心に見てみると、いじめ問題、モンスターペアレント、教師のメンタルヘルス不調、長時間労働などの問題が山積しており、教師には他者とのコミュニケーションの必要性が高まっているが、円滑なコミュニケーションをとれずに疲弊している状態である。児童生徒対応においても、児童生徒の気持ちを押し量ることは必須の資質であり、学級経営、教育相談、生徒指導、保護者面談、学習指導などあらゆる局面において、共感力が必要とされている。教員自身の共感力が低いようであれば、その教育は困難になることは明らかである。職場としての教育現場では同僚や上司部下とのコミュニケーションにおいても、場の空気を読んだり、状況に即応するためにも、共感力は必須である。そしてこれらの共感力が、教員のメンタルヘルスを大きく左右している面も重要であると考えられる。以上より、教育の現場では、今後より共感力が必要とされ、特に教師にとっては、共感力が教師力を左右するといつて過言ではない。

また児童生徒にも「生きる力」教育が推進され、共感力を高めることも要求されているが、発達障害の傾向のある児童生徒には、共感力は特に難しい分野であり、その共感力教育は困難な状態にある。発達障害、なかでも自閉スペクトラム症は、社会的コミュニケーションと行動・興味・活動の限局的かつ反復的なパターンという「社会性の困難」と「こだわりの強さ」から診断される。特に共感性の欠如が問題となっていることが多く、二次障害への影響などが懸念されている。

共感(empathy)とは、他者と喜怒哀楽の感情を共有することを指す。もしくはその感情のことである。共感については、これまで臨床心理分野、看護学分野、教育分野などで様々な側面からの研究・実践が行われてきた¹⁾。また共感のしやすさ(共感力)を客観的に測定するテストとして、対人性反応性指標(interpersonal reactivity index: IRI)^{2,3)}や多次元共感性尺度(Multidimensional Empathy Scale; MES)⁴⁾などが開発されている。これらは、共感の認知的側面と情動的側面の両側面を統合したり、個人特性としての共感性を多面的に理解したりする特性を持ち、以後の研究でも活用されている。Reynolds⁵⁾は、クライアント中心の共感尺度を看護領域で提唱し、実際に看護師の共感教育に活用し、その有効性が検証されている。この尺度は、クライアントまたは患者との言語的な対話中のカウンセラー(例えば、看護職)の行動と態度を説明する12項目からなっている。

最近では、これらの共感力尺度を評価指標として、共感力を高めるための教育介入プログラムが計画され、有効であるとの報告が散見されるようになった⁶⁾。しかし分野としては看護系が中心であり、患者と看護者の共感性についての検討が多く、一般の大学生を対象とした研究は少ない。そこで今回、大学生を対象とした共感性に関する教育介入研究とその成果を、文献から検討し明らかにすることで、今後の有用な教育資料となると考えた。

II 研究目的

大学生を対象とした、共感性に関する教育介入研究とその成果を文献から明らかにする。

Ⅲ 研究方法

大学生を対象とした、共感性に関する教育介入研究として掲載された論文から、「著者・論文タイトル」、「共感性に関する主な教育介入内容」、「共感性の評価指標」「共感性の変化」「主な成果」を抽出した。抽出後それらの内容について検討した。データベースはCiNii (Citation Information by National institute of informatics ; 国立情報学研究所)を使用した。「大学生」、「共感性」、「教育」を検索キーワードとし、2010年から2020年の期間で検索した。

Ⅳ 結果

データベースの論文検索日は2020年11月1日である。研究方法に記載した検索にて、CiNiiより69件の結果を得た。この内、本研究の研究目的に合致すると考えられたのは6論文であった。以下、各論文を簡単に紹介する。

青野⁷⁾は研究1では、コミュニケーションスキルトレーニングの一形態として、カウンセリング技法教育の講義を受講した大学生を対象に、共感力スケール⁸⁾を用いた質問紙調査を実施した。研究2では、研究1の受講生から一事例を選択し、受講後レポートの質的検討を行った。その結果、事例の経過から、受講者の自己受容、共感性などの対人関係能力の発達の過程が、記述内容の質的分析によって明らかとなった。本研究の結果から、カウンセリング技法の習得により、コミュニケーションのスキルを高めることは、自己受容を高め、他者や集団に対して配慮し、さらにはトラブル解決に対しても積極的に行動に移すことを可能にすることが示唆された。これらのトレーニングは対人関係能力の向上に有効であった。

岡ら⁹⁾は、HBV(B型肝炎ウイルス)に関する既習経験が一度もない大学生に対して、HBV感染者理解の学習効果を検討することを目的とした研究を行った。研究方法は、福祉系大学において「HBV感染者理解」に関する講義と質問紙調査を行い、回収したデータの中で学習経験のない大学生の記述内容を対象として、KJ法による質的研究を行った。その結果、①講義前は、授業テーマの理解が曖昧で、HBV感染者とも心的距離がある一方、今後の福祉実践への熱意も示された。②講義後は、感染予防策、社会的排除、感染被害の公的責任など福祉課題の明確化や、感染者への接近志向性が示された。以上のことから、「HBV感染者理解」教育は、1回でも、HBV感染に関する理解や感染者への共感性を高める効果があるとの知見を得た。

西村ら¹⁰⁾は、介護福祉系専門学校に通う学生を対象に実験群17名(男性6名、女性11名;平均年齢20.71歳)、統制群33名(男性15名、女性18名;平均年齢19.58歳)を設けた。共感性を高めるプログラムを開発し、そのプログラムの効果を検討した。その結果、共感性の構成要素とされる視点取得、ポジティブな感情への好感・共有、ネガティブな感情の共有については、プログラムの効果が確認された。

山村¹¹⁾は、特別の教科である道徳の内容項目のうち、とくに「主として人との関わりに関すること」に焦点を当て、場面想定法を用いた道徳授業の開発を行い、その教育的効果の検証を行った。他者との関わりである社会的行動と関連が指摘されている共感性のうち、視点取得に焦点を当て、個人ワークとグループワークを実施する、アクティブラーニングの手法を取り入

れた授業コンテンツをプロトタイプとして実施した。その結果、教員を目指す大学生に参加をもとめ、授業中に生成されたワークシートの内容を分析し、援助方略に着目する重要性や、立場の異なるグループのプレゼンテーションを聞くことによる効果があることを確認した。

島ら¹²⁾は、G大学に在籍し、2019年度の講義「健康教育」の内「柔道実習」もしくは「テニス実習」を受講した学生を対象とし、実習前（2019年4月）と90分/回、1回/週、6回の実習後（2019年6月）に、運動種目に対するイメージ、共感性、社会的スキルに関する質問紙調査を実施した。その結果、柔道実習は大学生の“共感性”とりわけ“視点取得”を有意に高めた。同一集団では無いものの、テニス実習を受講した大学生では、この変化が見られなかった。また、運動種目に対するイメージと共感性の一部に関係が見られた。

向出ら¹³⁾は、ダンスの授業を通して対人関係における心理的変容を検討した。対象は女子大学生1年生187名、ダンスの授業を7回実施した。授業前後において、心理尺度であるコミュニケーションスキル尺度、友人関係測定尺度、共感性尺度の質問紙調査およびダンスの好嫌・経験の有無について回答を求めた。その結果、授業後では、コミュニケーションスキル、友人関係の意識に有意な得点の上昇が確認された。共感性は、ダンスの好嫌では有意な得点の上昇は確認されなかった。ダンスの授業において、ダンスの好嫌・経験の有無にかかわらず、コミュニケーションスキルや友人関係への意識は、肯定的な心理的変容をもたらすが、共感性の向上には、ダンスの経験の有無のみが影響することが示唆された。

以上の6論文を対象として「著者・論文タイトル」、「共感性に関する主な教育介入内容」、「共感性の評価指標」「共感性の変化」「主な成果」といった項目による解析を行った（表1）。

大学生における共感に関する教育介入研究の内容は、体育実習も含めた共感性を高めるプログラムの実施が中心であった。内訳は、カウンセリング技法教育、患者理解に関する講義、場面想定法を用いた道徳教育、体育実習（柔道やダンス）といった教育介入方法であった。

共感性の評価指標として、共感力スケール、KJ法による質的研究、共感性の認知的側面と共感的感情尺度、授業参加者からの内観報告（質的研究）、多次元共感性尺度（2論文）が使用されていた。

結果として、すべての論文において共感性の上昇が認められた。4論文では、大学生の共感性を高めるための教育的介入プログラムあるいは体育実習を行い、前後での共感性尺度の上昇を検討していた。それらの研究では共感性の上昇が確認され、主な下位項目は「共感意図」、「視点取得」、「他者指向的反応」であった。しかし、共感性の「情緒的側面」に関しては変化は認められず、一部の研究では介入後に低下しているという結果であった。残りの2論文は質的研究であったが、同様に共感性を高めるための教育的介入プログラムを行い、施行後の参加大学生の言説分析から共感性が高まったと判断していた。

主な成果としては、トレーニングは対人関係能力の向上に貢献した、HBV感染に対する理解や感染者への共感を高める効果が認められた、視点取得を中心とした共感性についてプログラムの効果が確認された、授業によって視点取得に焦点をあてて共感性が得られた、実習は共感性とりわけ視点取得を有意に高めた、ダンス授業で共感性が向上した、といったものであった。

表 1 大学生の共感性に関する教育介入を行った論文の概要

著者・論文タイトル	共感性に関する主な教育介入内容	共感性の評価指標	共感性の変化	主な成果
青野明子 大学生を対象としたコミュニケーション・カウンセリング技法教育の講義を受講した大学生を対象に質的調査を実施した。	・研究1では、コミュニケーション・カウンセリングの形態として、カウンセリング技法教育の講義を受講した大学生を対象に質的調査を実施した。 ・研究2では、研究1の受講生から一事例を選択し、受講前後レポートの質的検討を行った。	共感性：共感力スケール(Maemura et al. 2009) ⁸⁾ 「情動力尺度」 「認知的共感力」 「共感意図」の3因子から各3項目、19項目を用いた。本尺度は項目反応理論により潜在特性値を推定して使用する尺度であるが、今回は素点を各項目因子として使用した。	・研究1においてカウンセリング技法教育の講義前後で、「共感意図」が有意に上昇した。「情動力尺度」「認知的共感力」も上昇傾向にあった。 ・研究2の経過から、受講者の自己受容、共感性などの対人関係能力の発達過程が、記述内容的分析によって明らかとなった。	・本研究の結果から、カウンセリング技法の習得により、コミュニケーションのスキルを高めるとは、自己受容を高め、他者や集団に対して配慮し、さらにはトラブル解決に対しても積極的に行動に移すことが可能にすることが示された。 ・これらのトレーニングは対人関係能力の向上に有効であった。
1 近畿大学臨床心理センター紀要: 3, 61-84, 2010	・福祉系大学の大学生に対して「HBV感染者理解」に関する講義と質的調査を行い、回収したデータの中で学習経験のない大学生の記述内容を対象として、KI法による質的研究を行った。	KI法による質的研究である。大学生の記述内容を検討した。	・①講義前は、授業テーマの理解が曖昧で、HBV感染者とも心的距離がある一方、今後の福祉実践への熱意も示された。 ・②講義後は、感染予防策、社会的排除、感染被害の公的責任など福祉課題の明確化や、感染者への接近志向性が示された。	・「HBV感染者理解」教育は、1回でも、HBV感染に関する理解や感染者への共感性を高める効果があるとの知見を得た。
2 日本福祉大学全学教育センター紀要: 3, 1-10, 2015	・介護福祉系専門学校に通う学生を対象に実験群17名、統制群33名を設けた。 一介護福祉系の専門学校生を対象とした効果検証。 ・共感性を高めるプログラムを開発し、そのプログラムの効果を検討した。	共感性の認知側面については、栗山他(2008)から「他者の感情に対する共感性」と「視点取得」を用いた。 共感性の感情的側面については、櫻井他(2011)の共感的感情反応尺度を用いた。この尺度は「ポジティブな感情の共有」と「ネガティブな感情の共有」、「ネガティブな感情への同情」の3因子から構成されるものである。	・視点取得については実験群で事後とフォロアップでの得点が高くなくなった。 ・ポジティブな感情の共有については、実験群で事後の得点が高くなり、フォロアップでもその効果が維持された。ネガティブな感情の共有については実験群で事後の得点が高くなり、フォロアップでも高かった。	・共感性の構成要素とされる視点取得、ポジティブな感情への好感・共有、ネガティブな感情の共有については、プログラムの効果が確認された。
3 教育心理学研究: 63(4), 463-466, 2015	・「主として人との関わりに関すること」に焦点を当て、場面設定法を用いた道徳授業の開発を行い、その教育的効果の検証を行った。 他者との関わりである社会的行動と関連が指摘されている共感性のうち、視点取得に焦点を当て、個人ワークとグループワークを実施する。アクティブラーニングの手法を取り入れた授業コンテンツをプロトタイプとして実施した。 ・近畿圏内の大学における幼児教育系の学科に在籍する女子大学生41名が授業に参加した。	・内観報告：授業参加者からの内観報告（口述）を受け、授業が受講者に与える影響を検討した。	・これまでの学校段階でも「相手の立場に立つて考えよう」といわれてきたが、今回の授業では、その方法が具体的にガイドされたのでわかりやすかった。 ・視点をいくつかつくことで、実社会で他者にたいする行動も変化しプレセンテーションを聞くことによる効果があることを確認した。	・教員を目指す大学生に参加を求め、授業中に生成されたワークシートの内容を分析し、援助方略に着眼する重要性や、立場の異なるグループのプレセンテーションを聞くことによる効果があることを確認した。
4 総合福祉科学研究: 11, 25-33, 2019	・G大学に在籍し、2019年度の講義「健康教育」の内「柔道実習」もしくは「テニス実習」を受講した学生を対象とした。 ・実習前と6回の実習後に、運動種目に対するイメージ、共感性、社会的スキルに関する質問紙調査を実施した。	・他者の感情や意見に影響されやすい事を示す「被影響性」、他者に焦点づけられた情緒反応を示す「他者指向的反応」、自己を架空の人物に投影させる認知傾向を示す「想像性」、相手の立場からその他者を理解しようとする傾向を示す「視点取得」、自己に焦点づけられた情緒反応を示す「自己指向的反応」の5因子で構成される多次元共感性尺度 ⁹⁾ を用いた。	・体育実習は大学生の「共感性」とりわけ「視点取得」を有意に高めた。 ・同一集団では無いものの、テニス実習を受講した大学生では、この変化が見られなかった。 ・また、運動種目に対するイメージと共感性の一部に関係が見られた。	・柔道実習は大学生の「共感性」とりわけ「視点取得」を有意に高めた。 ・同一集団では無いものの、テニス実習を受講した大学生では、この変化が見られなかった。 ・また、運動種目に対するイメージと共感性の一部に関係が見られた。
5 島孟道・田井健太郎・澤崎晴紀 体育実習が大学生の共感性並びに社会的スキルに及ぼす影響：柔道実習の効果に対する一考察 群馬大学教育学部紀要: 芸術・技術・体育・生活科学編: 55, 61-67, 2020	・対象は女子大学生1年生187名、ダンスの授業を7回実施した。 ・授業前後において、心理尺度であるコミュニケーションスキル尺度、友人関係測定尺度、共感性尺度およびダンスの好嫌・経験の有無について回答を求めた。	・結果、授業後では、コミュニケーションスキル、友人関係の意識に有意な得点の上昇が確認された。 ・共感性は、ダンスの授業では有意な得点の上昇が確認されなかった。	・結果、授業後では、コミュニケーションスキル、友人関係の意識に有意な得点の上昇が確認された。 ・共感性は、ダンスの授業では有意な得点の上昇が確認されなかった。	・ダンスの授業において、ダンスの好嫌・経験の有無にかかわらず、コミュニケーションスキルや友人関係への意識は、肯定的な心理的変容をもたらすが、共感性の向上には、ダンスの経験の有無のみが影響することが示された。
6 向山直子 ダンスの授業における大学生の心理的変容の検討：対人関係に着目して 教育科学研究集: 15, 62-69, 2020	・対象は女子大学生1年生187名、ダンスの授業を7回実施した。 ・授業前後において、心理尺度であるコミュニケーションスキル尺度、友人関係測定尺度、共感性尺度およびダンスの好嫌・経験の有無について回答を求めた。	・結果、授業後では、コミュニケーションスキル、友人関係の意識に有意な得点の上昇が確認された。 ・共感性は、ダンスの授業では有意な得点の上昇が確認されなかった。	・結果、授業後では、コミュニケーションスキル、友人関係の意識に有意な得点の上昇が確認された。 ・共感性は、ダンスの授業では有意な得点の上昇が確認されなかった。	・ダンスの授業において、ダンスの好嫌・経験の有無にかかわらず、コミュニケーションスキルや友人関係への意識は、肯定的な心理的変容をもたらすが、共感性の向上には、ダンスの経験の有無のみが影響することが示された。

V 考察

大学生における共感に関する教育介入研究の内容は、実習も含めた共感性を高めるプログラムの実施が中心であった。すべての論文において共感性の上昇が認められ、共感性を高めるプログラムあるいは体育実習の有効性が示唆された。

大学生を対象とした共感性に関する教育介入内容としては、一般的には共感性を高める教育プログラムの実施が想定される。実際、今回の文献的検討でもそのような教育介入研究が多く報告されていた。一方、茂木⁶⁾は、看護学生の共感性を高めるための教育介入研究について文献レビューを行っているが、その教育介入の内容は疑似体験学習が中心であり、今後は疑似体験学習に拠らず、患者の気持ちの理解を促す教育の必要性が強調されている。今回の大学生を対象とした文献的検討においては、教育介入の内容として、疑似体験学習は含まれず、カウンセリング技法教育、患者理解に関する講義、場面想定法を用いた道徳教育などが行われていた。また特徴的なものとして柔道やダンスの体育実習という教育介入の有効性が示唆されていた。共感性を高めるための教育プログラムで共感性が上昇するのは、当然ともいえるが、柔道やダンスはどのようにして共感性の強化につながったのであろうか。

柔道実習においては、柔道は取（投げる側の人のこと）と受（投げられる側の人のこと）の二人で実施するその競技特性から、他者理解を深めることができると考えられており、柔道授業場面において、「相手の気持ちに気づく」ことが有意に高まり、とりわけ他者への思いやりといった共感性や対人関係を円滑にする社会的スキルの向上に貢献することが期待される。対照としてテニス実習では共感性は上昇せず、単に対人競技種目を実施すれば「共感性」が高まるわけではなく、その変化に及ぼす要因がある可能性が示唆された。またダンス実習においては、授業内容が「リズムにのって体を動かしながら、仲間と共に踊る楽しさや喜びを味わいコミュニケーションを深める」などであり、他者と体の動きや発声を同調させていくことが、「他者指向的反応」を中心とした共感性を高めた可能性が指摘されている。これら身体を介した活動が共感性を高める可能性を強く示唆した研究より、一般的な座学やロールプレイが中心の共感性を高める教育プログラムに、身体活動を介したプログラムを導入することでより効果的な教育介入になる可能性が考えられた。

すべての研究で共感性が上昇しているという結果であったが、上昇が確認された主な下位項目は「共感意図」、「視点取得」、「他者指向的反応」であった。一方共感性の「情緒的側面」に関してはあまり変化はなく、一部の研究では介入後に低下していた。その理由として、理論的かつ実践的にカウンセリングを学ぶことにより、そこまで情動的に流されるように共感することが多かった者が、他者を共感的に理解するという、一歩進んだレベルの共感が可能になったのではないかと考えられた。共感の情緒的側面あるいは感情的共感とは「他者の感情をくみ取る力」であり、「他人の感情を自分のことのように感じる力」すなわち「感情移入」ともいえる。ジャンら¹⁴⁾は、認知的共感と感情的共感（または情動的共感）との間の決定的な違いは、前者には他人の視点に関する認知的理解が含まれるのに対して、後者には、他者と感情を共有することが含まれていることである。共感におけるこれらの異なる2つの側面は、発達を通して互いに関連し、相互作用すると述べている。以上より、共感力の情緒的側面は非常に重要であり、本側面を高めるプログラムやトレーニングが期待される場所であるが、現在まで文献的にもそのような試みは少なく、今後の調査研究が待たれる。

今後、大学生に対して、情緒的側面も包含した総合的な共感性強化を目標とし、身体活動を介するなどより工夫された教育介入方法による共感力教育を開発すべきと考えられた。

研究の限界と今後の課題

本研究の限界は一つのデータベースのみの検索結果を基にしていることが挙げられる。またデータベースには海外文献は含まれず、教育の世界共通かつ普遍的価値基準からは、全世界からの情報を集めることは重要であると考えられる。今後の課題としては、国内および国外も含め複数のデータベースを活用することである。また、本研究では教育介入内容とその成果に注目したが、分析をより深めるためにも、教育介入が行われた講義・演習・実習の位置づけや、対象となった学生の属性、評価指標についても詳しく検討していく必要がある。

VI 結論

大学生を対象とした共感に関する教育介入研究の内容は、体育実習も含めた共感性を高めるプログラムの実施が中心であった。6論文の研究すべてで共感性の上昇が認められ、共感性を高めるプログラムあるいは体育実習の有効性が示唆された。しかし下位項目の分析では、共感性の「情緒的側面」に関しては変化は認められず、一部の研究では介入後に低下していた。それゆえ、共感性の「情緒的側面」の強化を目標とした教育の必要性が考えられた。また特徴的なものとして柔道やダンスの体育実習という身体活動を介した教育介入の有効性が示唆されていた。今後、大学生に対して、情緒的側面も包含した総合的な共感性強化を目標とし、身体活動を介するなどより工夫された教育介入方法による共感力教育を開発すべきと考えられた。

参考文献

- 1) 青木好美, 片山はるみ, 鈴江毅. 共感～看護における共感の測定と開発～(William J Reynolds. The Measurement and Development of Empathy in Nursing). クオリティケア. 2020
- 2) Davis, MH. A multidimensional approach to individual differences in empathy. Catalog of Selected Documents in Psychology. 10, MS. 2124, p85. 1980
- 3) Davis, MH. Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. Journal of Personality & Social Psychology. 44: 113-126. 1983
- 4) 鈴木有美, 木野和代. 多次元共感尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて. 教育心理学研究. 56:487-497, 2008
- 5) Reynolds WJ, Scott B. Do nurses and other professional helpers normally display much empathy? J Adv Nurs. Jan;31(1):226-34, 2000

- 6) 茂木英美子.看護学生の共感性を高めるための教育介入研究の文献レビュー.足利大学看護学研究紀要. 7(1): 13-21, 2019
- 7) 青野明子.大学生を対象としたコミュニケーションスキルトレーニング-カウンセリング技法教育による対人関係能力向上への取り組み-.近畿大学臨床心理センター紀要. 3: 61-84, 2010
- 8) Maemura, et. al. The development of an Empathic ability scale International Meeting of the Psychometric Society. 2007
- 9) 岡多枝子, 片山善博, 三並めぐる. 「ふくし」教育における「HBV 感染者理解」の学習効果. 日本福祉大学全学教育センター紀要. 3: 1-10, 2015
- 10) 西村多久磨, 村上達也, 櫻井茂男.共感性を高める教育的介入プログラム:一介護福祉系の専門学校生を対象とした効果検証-.教育心理学研究. 63(4): 453-466, 2015
- 11) 山村麻予.多次元共感性理論を取り入れた道徳授業の開発とその効果 : 女子大学生を対象としたプロトタイプを通して.総合福祉科学研究. 11: 25-33, 2019
- 12) 島孟留, 田井健太郎, 霜触智紀.体育実習が大学生の共感性並びに社会的スキルに及ぼす影響 : 柔道実習の効果に対する一考察.群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編. 55: 61-67, 2020
- 13) 向出章子.ダンスの授業における大学生の心理的変容の検討 : 対人関係に着目して.教育学研究論集.15: 62-69, 2020
- 14) ジャン・デセティ, ウィリアム・アイクス.共感の社会神経科学.p288.勁草書房.2016